



Title	認知症とともに生きるために
Author(s)	瀬戸, ひろえ
Citation	平成28年度学部学生による自主研究奨励事業研究成果報告書. 2017
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/60335
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

平成28年度学部学生による自主研究奨励事業研究成果報告書

ふりがな 氏 名	せと 瀬戸 ひろえ	学部 学科	医 学 部 保 健 学 科 放 射 線 技 術 科 学 専 攻	学年	1 年
ふりがな 共 同 研究者名		学部 学科		学年	年
					年
アドバイザー教員 氏名	村上 靖彦	所属	人間科学部		
研究課題名	認知症とともに生きるために				
研究成果の概要	研究目的、研究計画、研究方法、研究経過、研究成果等について記述すること。必要に応じて用紙を追加してもよい。				

I. 研究第一期（7月1日～9月25日）

1. 研究目的

認知症患者・家族間コミュニケーション、認知症患者・介護士間コミュニケーションを対象とし、共通のエピソード記憶や患者に関する認識を共有できるかどうかを明らかにする。そしてそれが患者のQOL向上をもたらすかどうか探る。

2. 方法

特別養護老人ホームでボランティアとして働かしてもらい、ボランティアを通して施設の参与観察をさせていただく。

3. 結果

特別養護老人ホームにおけるボランティアでの観察を通して以下3つのことに気付いた。

- ① 認知症患者のご家族はあまり施設を訪れない（ボランティアでの観察より）。
- ② 施設従事者には認知症患者と共通のエピソード記憶を持つことは難しい（ボランティアでの観察より）。
- ③ 施設従事者には認知症患者から昔のエピソード記憶をひきだすことなら可能そうだと（ボランティアでの観察、介護士との会話より）。

4. 考察

まず、特別養護老人ホームでの field work を行うに当たっては家族・患者間のコミュニケーションではなく施設従事者・患者間コミュニケーションに焦点をあてるほかないことが分かった。だが、施設従事者は認知症当事者と同じ体験に対するエピソード記憶を共有することができない（認知症の臨床症状に関する文献 [中島健二ほか, 2013, p28]、認知症に関する field work 調査の文献[杉山孝博, 2016, p72]、ボランティアでの観察より）。しかしながら、施設従事者には認知症当事者の昔のエピソード記憶をひきだすことができそうだということが分かった（認知症に関する病理学的文献 [中島健二ほか, 2013, p28]、認知症に

関する field work 調査の文献 [井庭崇・岡田誠, 2015, p19, 29, 57] [杉山孝博, 2016, p56, 60] [永田久美子, 2015, p57] [水野裕, 2015, p48] [六車由実, 2012, p15-20]、ボランティアでの観察、介護士との会話より)。

5. 仮説

施設従事者には施設に入居している認知症患者の昔のエピソード記憶をひきだすことが可能であり、それは患者の QOL 向上につながる。

II. 研究第二期 (9 月 26 日～10 月 15 日)

1. 研究目的

施設従事者が認知症患者のエピソード記憶を引き出すことが可能かどうか、また可能な場合どのように引き出しているのか調査する。そしてエピソード記憶を話し、identity を表現することが認知症患者の QOL 向上にどれほど貢献するか探る。

2. 方法

- ① 認知症患者に identity を表現していただくことについて介護士に半構造化インタビューを行う。そこから介護士がエピソード記憶を引き出すことが可能かどうか、どのように引き出しているのかを分析する。
- ② ボランティアのなかで、自らの identity を表現できている際の認知症患者の反応を観察する。そこから identity を表現することが認知症患者の QOL 向上にどれほど貢献するか探る。

3. 結果

中等度以下の認知症でかつ、しゃべる機能が保持されている患者に関しては、年齢を聞く・その方がこだわりを持っていると見て取れる事柄に関して話を振るなどの手法を用いることで、介護士はエピソード記憶を引き出すことができていることがわかった。(介護士へのインタビュー、ボランティアでの観察より)。

一方それ以外の患者(つまり高度認知症の患者や会話が不可能な患者)からはエピソード記憶を引き出せないことが分かった(ボランティアでの観察より)。しかしながら、そのような患者の場合でも個々の行動の特徴や好みを理解することで、介護士は個々の identity をよく理解していることが分かった。(ボランティアでの観察、介護士へのインタビューより)。

ただし、それぞれの患者について、この identity の理解を QOL 向上につなげられている面とそうでない面があることが分かった。

A) エピソード記憶を引き出せる認知症患者について

a) QOL 向上につなげられている面

まず、自らの思い出について話すこと自体に患者が幸福を感じていることが分かった。(ボランティアでの観察より)。また、昔の職業・取り組みを行うことで自らの役割を果たしているときに患者にとって最も生き生きとしている時間であることが分かった(介護士へのインタビュー、ボランティアでの観察より)。

b) QOL 向上につなげられていない面

上記の通り、介護士はすべての患者の identity をよく理解し、それに合わせてレクリエーションを行いたいと常々考えている。しかしながら基本的な生活の介

助（食事、排せつなど）が忙しすぎて、やりたいと考える活動がほとんどできずにいるのが現状である（ボランティアでの観察、介護士との会話、介護士へのインタビューより）。

B) エピソード記憶を引き出せない患者について

a) QOL 向上につながられている面

一人ひとりの特質や好みを理解しそれにあった対応をとることで実際に患者の幸福度を向上させていることが分かった。

（会話の方法・内容を一人ひとりの特徴や好みに合わせる、好みの音楽をかけてあげる、一人ひとりの不安・不穏を表す行動を読み取り不穏・不安を解消してあげるなど）（介護士へのインタビュー、ボランティアでの観察より）。

b) QOL 向上につながられていない面

(A)-(b)で述べた通り介護士は慢性的な忙しさを抱えている。そのため、会話をする時間自体取れない、不安・不穏のサインを見つけても対応してあげることができないといった状態にしばしばになってしまう（ボランティアでの観察より）。

4. 考察

- ① エピソード記憶を引き出せるにしろ引き出せないにしろ介護士は個々の identity を十分に理解している。（ボランティアでの観察、介護士へのインタビュー、介護施設における field work 調査に関する文献[六車由実, 2012, p82-94]
- ② 介護士にはその深い理解を QOL 向上に生かしきれない。それは入居者の基本的生活を支えることが第一に来るためにコミュニケーションやレクリエーションが後回しになる傾向にあるためである。（ボランティアでの観察、介護士へのインタビューより）

5. 仮説

ここまでのボランティアの経験を通してボランティアには「4-②」を解決する大きな可能性があると考えた。それは以下3つの理由からなる。

- 施設における課題はコミュニケーションやレクリエーションをするための時間がとれないことだが、これらはむしろボランティアという存在にとって第一に来る活動目的である。
- ボランティアは voluntary だからこそボランティアである。つまりコミュニケーションやレクをやりたいという欲求が強いとかがえられる。
- 特に学生に関しては様々なクラブ・サークル活動にアプローチをかけられるため、患者の identity に合わせたレクリエーションを企画できそうである。

研究三期（10月16日～11月30日）

1. 研究目的

ボランティアが研究第二期の考察②で述べた施設の課題（コミュニケーション、レクリエーションのための時間が取れないこと）を解決する存在となりえるかを探る。

2. 方法

- ① ボランティアメンバーを集める。
- ② ボランティアメンバーに日常ボランティアで会話してもらい/学内のサークル、部活を生かしてレクリエーション活動を開催する。

- ③ ボランティアを観察すること、施設からボランティアに対する評価をいただくことによって、ボランティアがどれほど施設の課題を解消できるか分析する。

3. 結果

確かにボランティアには施設の課題を埋めるだけの potential はあった。以下3つの事実から証明できる。

- 実際にボランティアには施設の患者とコミュニケーションをとろうという意欲がある（ボランティアでの観察より）
- 実際にまちかね祭に施設の認知症の方々を招待するという「まちかね祭レク」を企画実行した。また、施設企画の紅葉狩りレクリエーションの手伝いを行ったが、これはボランティアがなければ介護士不足により実行が難しいものであった（介護士との会話より）。
- 私一人についてだけだが、研究第二期で学んだ患者一人ひとりの identity を抑えたうえで、一人ひとりの identity に合わせた対応を取ることができた（ボランティア観察、介護士・施設長からの評価より）。

しかしながらボランティアには課題が多く存在していることが分かった。

- ボランティアメンバー全員が認知症患者の identity を理解し QOL 向上に生かすことは難しいといった identity 尊重に関する課題（ボランティアメンバーとの会話、ボランティアでの観察より）。
- 「認知症患者さんの役に立てているかわからない」「介護士の方々の役に立てているかわからない」といった理由によりやりがいを感じられずボランティアをやめてしまう（ボランティアメンバーとの会話より）。

4. 考察

ボランティアには十分に施設課題に答える potential はある。

A) コミュニケーションについて

介護士からの情報やボランティア内での経験を踏まえれば患者の identity を踏まえたコミュニケーションがとれる。

B) レクリエーションについて

介護士不足のせいでレクリエーションができないという状態からレクリエーションができるという状態にすることができた。

しかし identity 尊重に関する問題点が多く、その有用性を活かしきれていない。また、この問題点は、ボランティアメンバーに「やりがいを感じられない」と感じさせる原因にもなっている。これらの問題は以下2点が原因である。

- ボランティアメンバー内での情報共有システムが確立していない。
- IIで述べた通り介護士は一人ひとりの患者の identity を深く理解しているが、その知識をボランティアメンバーが生かせていない。

5. 仮説

「4. 考察」で述べた課題は以下2点によって解決可能であると考える。

- 介護士・ボランティアメンバー間情報共有システムを確立する。
- ボランティアメンバー間情報共有システムを確立する

参考文献

- 井庭崇・岡田誠. (2015). 旅のことば 認知症とともによりよく生きるためのヒント. 丸善出版株式会社.
- 永田久美子. (2015). 認知症の人たちの小さくて大きなひと言. harunosora.
- 水野裕. (2015). 実践パーソン・センタード・ケア. ワールドプランニング.
- 杉山孝博. (2016). 認知症の人のつらい気持ちがわかる本. 講談社.
- 中島健二ほか. (2013). 認知症ハンドブック. 医学書院.
- 六車由実. (2012). 驚きの介護民俗学. 医学書院.